



TITLE:

<批評・紹介>支那の家族制 諸橋  
轍次著

AUTHOR(S):

西田, 太一郎

---

CITATION:

西田, 太一郎. <批評・紹介>支那の家族制 諸橋轍次著. 東洋史研究  
1940, 5(6): 460-461

ISSUE DATE:

1940-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145710>

RIGHT:

言語學者で史學者ではなかつた博士の事として、已むを得ない事であらう。

それは兎に角として、服部氏の「はしがき」によれば、故博士が本書の翻譯を行はれたのは大正年代との事であるが、大正年代ならば、本書が日本内地に將來されて間もない頃と思はれる。その頃から本書に着眼された慧眼に敬服すると共に、恩師の舊業を繼いで、蒙古語學界に活躍せられる服部四郎氏の御自重を祈りつゝ筆を擱く。

(山本 守)

## 支那の家族制

諸橋 轍次著

昭和十五年五月二十八日 大修館發行

人類の歴史は、生きた人間の社會的活動がなければ、有り得ない以上、人間が生きていることゝ、生み生まれることゝは、その缺くべからざる條件である。従つて、生活資料の生産と子孫の繁殖とは、生産の様式及び家族の形態として、社會の運行に重要な關係をもつてゐる。そのためでもあらうか、經濟的方面の研究と共に、家族制度の究明は、支那の社會を理解するための重大な要因として、多くの人々によつて行はれて來た。今こゝに支那の家族制度の權威的研究者たる諸橋博士の「支那の家族制」が印行されたことは、上述の意味に於て甚だ有意義なことである。

博士は、本書を、その小引に於て、「大體大學に於て講義した草案を整理したもので」、「一般讀者の便宜」のために、引用文の如きも平易を旨とした「解説」書であると謂はれる。即ち終極は「禮制の原意を捉へ」て、自己の説を立てるべきではあ

るが、それには「解釋の變遷」と「學派の相違」とを知るに非ざれば「古禮」を知ることが出來ぬから「先決要件として先づ解説」を試みられたのである。

それは解説書であるから地味で、禮書綱目とか、禮書通故とか、及びその他の禮書政書と概ね方法を同じうし、加藤常賢博士の「支那古代家制度研究」の如き華やかさが無いところから、つまらぬやうに言ふ人もあるやうである。然し私はこの書物に重大な意義を認めたい。その理由の一つは、博士が小引で述べられた所である。第二の理由はかうである。此の書物で述べられたやうな禮制が果して事實行はれたかどうかは大きな疑問であらう。が、たとひ事實は非常に相違してゐたにせよ、又禮制に定説を缺くにせよ、定められたこれらの禮制は支那人の理想であり、それが他の諸方面の理想とも結合して、常に現實に對して少なからざる影響を有してゐるからである。こゝに禮制そのものゝ研究の意義もあると思ふ。

さて此の書物は家族制に必要な事項、即ち婚姻・喪葬・祭祀・宗廟・名字諱諡・親屬・姓氏の七篇に於て、詳細に禮制に關する學派の相違と解釋の變遷とが述べられ、自己の見解が與へられてあるから、最後に附けてある索引を利用するならば、右の事項に關する殆ど總べての事柄は容易に知り得、家族制度に關する一種の辭典の如き役目をも果し、家族制度研究には是非一備へるべきものである。

たゞ少しばかりあつかましい批評を述べさせて戴くならば、如何に解説を主としても、やはり何らかの結論が與へられねばならぬ以上、純經學的立場に立てば、そこに越え難い限界が出

來ることである。いま支那思想上重要なものの一つである「天」の祭を例に取らう。天の祭は帝の祭及び禘の祭と關聯してをり、帝とは本來始祖又は遠祖を現す言葉で、この帝が天上に在るとする思想から、祖先崇拜が天神崇拜となり、後には抽象的な天を祭る圓丘祀天にまで發展したことを見逃すことは出来ぬ。これについては小島教授の「分野説と古代支那人の信仰」(東方學報京都第六冊九—十五頁)参照。又「天」に對する「地」の祭を見よう。諸橋博士も第五節地祇祭に於て方澤祭地と社稷祭とを述べてをられるが、この社の祭も、よく究めるならば、氏族社會の集團の神であることは想像出来る。この氏族社會の神が領土の神となり、農業との關係から社稷神となり、後には抽象的な地を祭る方澤祭地に進展したのである。この天地の祭のみよりしても、經學的立場から一步踏み出るならば、相當面白い家族制度研究に對する示唆が與へられるにも拘らず、この書物では、天地の祭が家族制度とは關係が甚だ稀薄になつてゐる。して見れば經學的方法是必然史學や社會學等によつて根據が與へられる場合にのみ可能となることが分らう。博士は家族制度研究の大家であり、離婚とか亂婚とか(二—四頁)、賣買婚(七頁三七頁)とか、タブー(三頁三三五頁)とかによつて色々の解説を與へてをられるところから見ると、社會學等にも御造詣が深いから、次には「立説」を主とした著述によつて又々吾人を啓蒙して戴きたい。その場合私として知りたい事は、一、庶民の家族構成員の餘り大きくないのは何故か。従つて、二、宗族的結合を目的としての宗法が庶民の間に存したとしても(四三四頁)、何故に鰥寡孤獨の問題が相當やかまし

く言はれたか。三、奴婢は、所有者の側から見れば家庭へ他人を入れることであり、奴婢自身に於ては家族の分散を意味するが、如何やうに發生し、如何やうに取扱はれたか。四、宗法と均分相續とは如何にして兩立しうるや。等々である。何も分らぬ人間は、教へられて少しでも知識を持つと、何でも慾張つて尋ねたがる者である。私の場合でも同様。

(西田 太一郎)

## 支那精神

(世界精神史講座二)

世界歴史空前の轉換期に際して、東西兩洋に亘る過去並びに現代の思潮を省みて將來の人間精神の歸趨を考へることは吾等に取つて喫緊の時務と云ふべきである。時に東亞新秩序建設の一翼として新しき東洋文化の創造が吾等に委ねられてゐる時、その媒介となるべき過去のアジアに於ける輝かしき文運を跡ねることは何よりも急がねばならぬ。本冊は既刊の「日本精神」「印度精神」と共にこの要望に添はんとして企畫し出版されたもので、執筆者九氏、何れも學界一方の重鎮で居られる。私の淺學を以てしては批評紹介に堪へないと思ふが、この書が廣く讀まれる爲にも、その價值の一斑を傳へかつ若干の感想を述べさせて戴きたいと思ふ。なほ紙數の都合上、本意なくも内容の紹介は一部分に止めねばならなかつた。

### 儒教概説

諸橋 徹次

- 一 儒教の領域
- 二 儒教の成立及發達
- 三 儒教の道德

(頁數四九)